

---

# **バカとテストと転生者の物語。**

泉 龍牙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと転生者の物語。

### 【Zコード】

Z8913V

### 【作者名】

泉 龍牙

### 【あらすじ】

美川香は極々普通の高校生……だが、それは表のみ。裏では？ チンピラ狩り？としてかなり有名だった。そんな香はある日、とあるチンピラに殺されてしまう。死んでしまったとの自覚がはつきりあり、「短い人生の幕を閉じたな」と思っていた、その時！ 香は神様に日ごろの感謝として、死ぬか転生するかという一択を与えた！ 勿論後者を選び、香は転生し、刹那翠という名前で再び人生の幕を開けた。  
——腐作者が贈る、物語。

原作とは全く関係ありません、と書いていましたが、  
前言撤回。暫くは原作寄りで行かせて頂きます。

私は、歩いていた。普通に歩道を歩いていた。何も変わったことはしていない。そこんじょらのチンピラのよう人に人を殴したり、そこんじょらのチンピラのよう人に人を蹴ったり、そこんじょらのチンピラのよう人に人を蹴つたりなんて一度もしたことがない。：人を殴るくらいはあつた（気がする）が金目当てではなかつた。逆に金目当てで襲つてくるやつを返り討ちにするくらいだ。

「おい、そこの譲ちゃん。ちよつとお兄さんたちに着いてくれるかなあ？」

主に「<sup>チンピラ</sup>どき」にこういう奴らをフルボッコにするために殴る。

相手は……5人か。刃物さえ持つていなければ余裕だな。一人ならまだ大丈夫か。

「解りました」

とりあえず話しかけられたら着いていく。

チンピラが連れて行く場所はやつぱり……人通りの少ない路地裏。

「譲ちゃん、怪我したくなかったら金渡せや」

私は金髪に襟首をつかまれる。

「反抗するなら殺したっていいんだぜ？」

茶髪の男が胸の前で腕を組みながら二ヤニヤしている。

「こういうふざけた奴は嫌いだ。気持ち悪い。

「悪いが私は金など持つてないぞ。私はバイト帰りだ」

「嘘つけ！ 街でそんなカツコして歩く奴がバイト帰りなわけないだろうつ……」

金髪は私を壁に叩き付けた。背中に激痛が走る。骨折はしないな。

ちなみに嘘はついていない。本当にバイト帰りだ。コンビニのアルバイトを終わらせてきた。

「つ……」

「金をえ出せば痛い目見なくて済むんだぜ？」

「……そうか。そんなに警察送りにされたいんだなお前ひ

私は立ち上がり、指をポキポキ鳴らす。

「女一人で男に勝てると思つてんのか？」

黒髪でこピアスをした男は腹が立つているようだ。

「相手が悪かつたな。私は柔道・剣道・武道・弓道・少林寺をマスターしている。あと、いざという時の為に短剣も所持しているぞ」  
そういうながら髪を結び、ポケットから取り出した頭に赤いバンダナをつける。

「ま、まさかお前、チンピラ狩りの美川か！？」

真っ白髪の男が私に問いかけてきた。

……私も随分と有名になつたものだな。苗字を知られているなんて。それにしても？ チンピラ狩り？ と呼ばれているとは……。まあ、似たようなことはしていたかもしねない。

「チンピラ狩りだあ？」

金髪は知らないらしい。そりやそうだ、本人の私ですら今初めて知つたんだ。

「知らないんですか御頭！ 今まで数々のチンピラを警察送りにしてきた女ですよ！ 特徴は赤い長髪に翠の眼、赤いバンダナと腰につけた短剣らしいです！ 裏ではかなり噂になつてます！」

銀髪の男が焦つて金髪に説明している。

「多分、それは間違いなく私だろ？」

『ぬあにいいいいいい！？』

金髪以外が驚く。

「フン！ チンピラ狩りなんぞ俺たちの敵じゃがない。こいつちは全員ナイフを所持しているからな」

あ、これは拙いことになつてしまつたかもしけなくもないかもし

れない。一人なら余裕だが全員となると私でも勝てる気がしない。

ここは逃げるか否か。逃げれば私の人道に反する。闘えば死ぬ（

かもしねない）。

嫌、待てよ？ 相手がナイフの扱いが下手であれば私にも勝機があるかもしねないぞ？

……よし、少し闘つてみてもしナイフの扱いが上手かつたら逃げるとしてよう。何もしないよりはマシだろうしな。

私は構えた。

「……かかつてこい」

「随分と舐められたものだつ！」

金髪は切れた。右手で私に殴りかかる。

「甘い」

私はそれを受け止め、金髪を投げ飛ばした。

投げ飛ばされた金髪は普通に痛がっている。いい気味だな。だが、こんな程度で痛がつていてはいけないと私は思う。

「Jの小娘、よくも御頭を！」

でこピアスの蹴りを難なく避ける。でこピアスは私の後ろのコンクリートの壁に頭を打ち付けて氣絶した。

「Jのでこピアス面白いぞ。コンクリ壁に漫画のよつな効果音で頭を打ち付けるとは。私に蹴りを入れようとした筈なのに頭からぶつかるのは凄い。

「……待てよ？ Jのでチンピラ狩りの美川を殺せば、俺たちはチンピラの中のチンピラってことになるよな！？」

銀髪が思いついたように言つた。私は殺されること前提かこの野郎。

「やうなればオレたちの名は全国に知れ渡ることになるー。全国のチンピラを従つうことができるんだー！」

「おおつー！」

茶髪が歓声を上げた。

「というわけで美川！ 死んでもらうぜー！」

茶髪は私の方を向き、ナイフの刃を向けて走つてくる。

正面突破か。面白い。こんな奴は初めてだ。

私はそれを避け、奴の右腕をつかんだ。そして力を入れる。

「いだだだだだだだっ！！」

茶髪が涙目になっている。

ほう……こんなのが痛いのか。私はまだ本気の50%も出してはいないが。

グキッ

右腕の間接をを曲がらない方向に曲げてみる。

「ぎやああああああああああああつ……」

と叫び声をあげ、茶髪はだらんとうなだれた。氣絶か。

残りは白髪、銀髪、金髪の3人だな。茶髪はナイフの使い方が下手糞すぎた。楽しくない。

「チンピラの中のチンピラを田指して！ お前ら、一斉攻撃だ！」

『了解御頭！』

金髪の言葉に、白髪は右で、銀髪は左で殴りかかってきた。

「…私は甘い食べ物より辛い食べ物の方が好きだが」「そう言つてため息をつき、それぞれの腕を受け止めてから腕をねじつた。そして、男の急所というものを思い切り蹴る。

『○#? \* ? ! ! ? ?』

一人は言葉にならない言葉を放ち、倒れた。

「急所を打つのに抵抗はないのか？」

金髪が顔を引き攣らせて私に訊ねる。もちろん私はすまし顔で、

「勿論だ」

と答えてやつた。

「抵抗があつたら今までチンピラを倒す」とは出来ていなかつたと思つぞ」

「…………」

金髪は突然笑い出した。

「どうした？ 気でも狂つたか？」

「……お前を殺すのは惜しい。チンピラ狩りの美川とか言ったよな？ お前、俺たちの仲間にならないか？」

「…………はあ？」

私はいつになく聞抜けな声をあげた。

チンピラの仲間に誘われた？ このチンピラ狩りと言われる私が？ 仲間になるくらいならとっくに誰かについてるに決まってるだろ。一度目だし。流石に一度も誘われるとは思わなかつた。

「断る。そんなことをしたら私の人道に反するからな」

「そう言つと思つた」

胸の前で腕を組み、威張り、私をどんどん苛々させる金髪。

「どういうことだ」

眉間にしわを寄せ、私は金髪に訊ねた。

「これは時間稼ぎにしか過ぎなかつたところ」といわ

つ！？ 時間稼ぎだと！？

私が驚いた瞬間、心臓付近に刃物が刺さつたような痛みに襲われ、前のめりに倒れこんだ。

「な……何を……」

「おれっちが準備を整えるための時間稼ぎだよ、お譲ちゃん

」この声は確かあのでこピアス……やられた。

「正面突破では勝てそうになかつたからな」

「それよりも御頭！ おれっちらはこれからチンピラの中のチンピラですぜ！」

「嗚呼。そうだな」

私をこんな状態にして、喜んでいる金髪と黒髪。こいつら、絶対にこのままじや済ません。

私は、ウエストポーチから短剣を取り出し、金髪の左足のズボンのすそに思いつきり差し込んでやつた。足にぶつ刺すつもりだったが外してしまつた。だが、かなり深く刺さつた筈だ。

「つー？ この小娘<sup>ガキ</sup>つ、俺が愛用しているズボンに穴を開けやがつ

た  
！」

金髪は相当怒っている。

「そんなに大事なら、着てくんないよ」

和の意語

フ……とうとう死ぬのか、私。

目が覚めるとそこは、ほとんど何もない真っ白な空間だった。そんな中で、私は何か軟らかいものにもたれかかっている。この軟らかいものは低反発枕……ではないだろう。流石に。じゃあ何だ……？

「もしかして起きちゃつた？」

真上から聞こえる大人の女性のような甘い声。上を向くと、真ん

「うわあああああああつ！？」

私は急いでその女性から離れる。金髪碧眼の美女だ。白い服を着て、まるで天使のような神様のようなオーラをかもしだしている。と言うかあの人胸でかつ！？

「あら、そんなに引かなくてもいいじゃない。チンピラ狩りの美川さん」  
カオル

女性は子供っぽくウインクをする。

「何で私の本名を知ってるんだ!?」 何で? チンピリ狩り? の異名

異名を知っているということはこの人も裏のチノヒラ人間か！？

「ちよつとあ、そんな一気に質問しないでよ。わたし神様とはいえ

こと出来ないわ

私がたくさん質問を投げかけたのに対し、女性は子供のよつて膨れつ面になる。……え？

「今、神様って言った？」

「そうよ。わたしは神様なの。よろしくねつ  
いや神様、？？じゃないだろ、？？じや。

「それじゃあ、香の質問に答えさせてもらひづわね。  
さつきも言つたとおり、わたしは神様。だから、あなたの**本名**<sup>フルネーム</sup>も  
知つてゐる。異名を知つてゐるのも同じ理由。

で、ここがどこかって話だけど、ここには死後の世界の一歩手前よ。普通の死者がこれる場所じゃないのよ。つまり、あなたは普通の死者じやないつてコ・ト」

神様が私に解りやすい説明をしてくれる。今の言葉で、本当に私は死んだんだと改めて今実感した。

「何で私は普通の死者ではないんだ？」

「それはね香、わたしがあなたに感謝してるからよ

「……はい？」

神様が感謝？ 私なんかに？

私が何か神様に感謝されるようなことをしただらうか？

「意味が解らん」

今ふと思つた。相手は神様なのだから、ここには敬意を払つた方がいいのだろうか。

「そりや解んないでしょうね。ちゃんと教えてあげるに決まつてるでしょ。

香はたくさんのチンピラたちを警察送りにしてくれたじゃない。そのおかげでチンピラに殺される人が減つて、使者を送る仕事が減つたのよ。だから、感謝してるの。解つた？」

仕事が減つて嬉しいのかこの神様。まあ神様は面倒だらうが……。

「じゃあ何で神様なんてやつてるんだ」  
私はため息をついた。

「わたしの家は代々神様なの」

「神様にも家があるんだな」

「ええ

面白くて思わず表情が緩んでしまいそうだ。

「さあて香。あなたはこのまま死にたい？ それとも転生したい？」  
突然こんな質問をする神様。

「……できることなら転生したいが、そんなこと出来るのか？」  
「わたしは神様よ？ そんなことは朝飯前。じゃあ、早速転生の手続きを始めるわね」

そう言つて神様は何処からか取り出したノートパソコンを開いた。  
「……って、どう考へても行動が早すぎだろ！」

「？ 善は急げ？ って言つじやない。

あ、そうそう。転生先と転生後の年・性別・服・年齢はわたしが決めておくから、新しい名前を考えておいて。男になつても女になつてもいいような名前ね」

力タカタとキーボードを打つ音。神様、タイピング結構早いんだな。もしかすると私より早いかもしれない。

と、いろいろ考えるのはいつたん止めにして、名前を考えるか。せめて性別さえ教えてくれれば考えやすいんだけどな……。

「決めた？」

「まだ一分も経つてねえよつ！」

思わず突っ込みを入れる。

「丁度一分よ。早く決めて。何なら、わたしが決めてあげてもいいけど？」

「遠慮しておく」

「名前……名前……か……」

「刹那翠セイジナツリ」

「オッケー。じゃあ、転生後はその名前で名乗つてね」

「嗚呼」

私は頷いた。

「そついえば、何で翠なの？」

神様が私に訊ねる。

「……田の色が、翠だからだ」

「フフツ、単純ね」

多分今、私の顔は林檎や柘榴よりも、髪の色よりも赤い。

「でも、それなら髪の色に関係する名前でもよかつたんじゃない？」  
「何といっても私はネーミングセンスがないからな。考え込むとどんどん変な名前になつていくから、すぐに思いついた名前にしたんだ」

私の言葉に神様は笑つた。

「それじゃあ。

チーンピイパイ、転生の扉よ出でこおーい！」

ブォン

バカバニザイ

漫画のような凄い効果音がして、私の目の前に筆で？馬鹿万歳？  
と書かれた扉が現れた。

「何故に？馬鹿万歳？」

「気にしなくていいのよ。あ、そつそつ。転生後の性別とかいろいろ確認するわよ。

名前は刹那翠。性別は男。転生は13年後、中学の入学式一時間前。大手企業社長の一人息子。現在は忙しい親の変わりに育ててくれた叔母の家に住んでる。髪の色は赤、目の色は翠。これでいいわね？」

神様はパソコンに書いてあることを読み上げた。

「……ちょっとマテ。何で私は転生後が男になつてるんだ」「気にしなーいのつ」「嫌な予感しかしない……。

「それじゃあ、扉を開いて新しい世界で頑張つてね。？チンピラ狩り？は……好きにしていいわ。継続してもいいし、止めてもいい。わたしは継続してほしいけど。行つてらっしゃーい」

私が扉を開けると、そこは崖のようなところになつっていた。私はそこに飛び込んだ。

……？チンピラ狩り？は…どうじょうか。また転生前と同じようになる可能性もあるから止めておこうかな。

どーせ短剣もバンダナもなくなつてゐだろ？

私は目を開けた。

「翠ー！早く起きてー！入学式でしょーーー！」

……あ、そうか。私は転生したのか。ここは確かに…叔母の家、だつたかな。

ていうか何かいろいろ違和感を感じる。主に股間の間。…本当に男になつたんだな、と実感する私。

とりあえず起き上がりベッドの上から降りる。なんだか少し目線が高くなつた気がした。

「翠、いつまでグズグズしてるの！ 遅れるわよ！」

多分この声は叔母だ。じゃあしあうがない、制服着るか。

「……これかな」

私はその辺にかけてある制服らしきものを手に取り、着てみる。サイズもぴったりだ。

そして、部屋を出た。右は階段、左は長い廊下。右に曲がり、階段を使って一階に降りる。

「ようやく降りてきたね翠。ほら、早く『飯食べなさい』

笑顔で私に話しかける女性。髪を後ろで一つ結びにしていた。叔母とはきっとこの人のことだろう。

一応私にとっては初対面だ。敬語を使っておくか。

「はい」

そう言つて私はテーブルの席に着く。「飯に茄子の味噌汁、玉子焼きと、一般的な朝」はん。

「いただきます」

「それにして翠、やつぱりその制服似合つねえ」

「そうですか？」

「玉子焼きを一つ口に放り入れる。……甘いのに嬉しい。」

「嗚呼！ 美代子が見たら似合ひつて言つて決まつてゐるわ。」この叔母さんが言つんだから信じな！」

母親の名は刹那 セツナ 美代子と言ひひじこ。あと、叔母は母親の一つ

上の姉だそうだ。

「学校もちょっと遠いけど、自転車があれば10分しかからないし。よかつたねえ翠」

「はい。あ、叔母さん、この玉子焼きおいしいです」

「そつかい！ それはよかつた」

叔母は満足そうに笑つた。

「これから」の世界での生活が始まるんだ。

## 一問目

「翠、話があるわ」

海の家の掃除中、突然叔母が私に話しかける。

「どうしたんですか叔母さん」

「アンタも高校生なんだから、一人暮らしをしたつていい年なんだよ」

え……？

「どういう意味ですか……？」

「したいときは一人暮らししていってことさー。こつちは少し寂しくなるけど、きっと大丈夫。一人暮らししたいときはいつでも言いな? あたしが手配してやるから」

叔母さん……。

「…ありがとうございます……っ」

私は叔母の言葉に泣きそうになりながら、お礼を言った。

自分で言うのもなんだが、転生してから私は少し性格が丸くなつた気がする。この人に育ててもらつて、久しぶりに感謝というのを思い出すことができた。

……あ、現在私は15才だ。転生して4年目になる。つまり、高校一年生。

転生前も楽しかつたが、今も楽しい。勉強したり、勉強したり、勉強したり……こつちの世界はかなり勉強に集中できるんだ。まあ、高校に入学してからは出来なくなつたけど。

なんつーか私、今……虧め? つてのを受けてる。別に返り討ちにしてもいいが、また? チンピラ狩り? みたいなあだ名を付けられたくない。面倒だ。

あ、あと入学式が終わつて部屋に戻つたときに気づいたんだが、神様から短剣とバンダナとウエストポーチが贈られていた。前世で

使ってたやつそのものを。最期にあの金髪のズボンの裾にぶつ指した筈だったが、別に気にしてはいない。この短剣はお気に入りだからな。

さて、さつき叔母が言つてた一人暮らし。実は丁度私も叔母に相談しようと思つていたところだ。許可してくれたときの行き先も決めている。話してみるか。

「…叔母さん」

私は叔母に話しかけた。

「なんだい？」

「実は私、一人暮らしのこと考えてたんです。でも言い出すタイミングが掴めなくて……」

叔母は私の言葉に驚いていた。

「そうだったのかい。なら早く言つてくれればよかつたのに。じれつたいねえ」

驚いてはいたが、どこか喜んでいるようにも見える。

「それで、行きたい学校とか、決めてるのかい？」

私は頷いた。

「文月学園がいいと思つてます」

「召喚獣やらなんやらかんやらがあるあの学園か！ あそこならあたしも賛成するよ！ いろいろやらこしごと、翠の為になると思うからねえ！」

「本当ですか！？」

この叔母の言葉はとても嬉しかった。まさか、許してもらえたとは夢にも思つていなかつたから。

「じゃあいっぱい勉強しなきゃね！」

「はい！ 頑張ります！」

というわけで。

私は一ヶ月間、勉強のみに励むことにした。

高校に行つても休み時間は図書館で勉強する（だつて図書館なら静かだし。騒いでたらつまみ出される）。

何故勉強に励むことを決めたのか？

それは、？クラス振り分け試験？というものが文月学園には存在するからだ。私はぜつつつつたにFクラスにだけは逝きたくない。漢字はきっと…いや、絶対に違わない。

図書館通りを初めてから四週間が経つた。やつぱり図書館は静かで勉強に集中しやすい。

「セーツナ君」

後ろから声がした気がしたがきっと空耳だろう。

「無視すんなよ刹那翠」

つたぐ、今日は空耳がよく聞こえるな。集中が切れる。「兄貴い、刹那<sup>コイツ</sup>意地でも無視し続けるつもりです」「なら無視できないようにしてやればいいだろ？」

「流石兄貴だ！」

後ろで「ちやーちやーと五月蠅いなこいつら。殴りたい。

と思っていると、私が座っている席の隣に黒い長髪のナルシストが座った。

「刹那、何やつてんだ？ 勉強か？」

ナルシストは私の勉強の邪魔をしようとしているようだ。勿論無視は継続。

「いい子ちゃんは大変だなあ。成績を維持しようと頑張ってるのかあ」

もう片側に、黒髪のショートヘアが座る。その言葉と同時に、真ん前には茶髪の坊主が座った。

「刹那は誰にも首席の座を奪われたくないから勉強してるんすよね

え？」「

……こいつらウザい。

私は席を立ち、図書館を出た。多分あいつらはこれを誘っていたのだろうが、あえて乗つてみる。

「かかつたな刹那！」

いつの間にか茶髪坊主に待ち伏せされていた。  
「ササモト 笹本、刹那を羽交い締めしろ」

「了解つす！」

茶髪坊主は私を羽交い締めする。と、ナルシストが私の鳩尾を殴つた。少し痒いくらいだが、気絶をしたフリをしておこう。私はショートヘアに担がれた。どこに連れていくつもりだよこいつら。

私が担がれて来た場所は校舎裏。またか。まったく、こいつらは懲りないな。

「兄貴。刹那コイツどうします？」

「ドサツ

その辺に放り投げられる。

「目が覚めないうちに殺りたい。だから、今のうちに磨いでおくのが一番だろう」

『了解（つす）！』

そう言つてショートヘアと坊主が鞄の中から取り出したのは……ナイフだった。前世で私を殺したナイフにそっくりだ。

三人は座り込んでナイフを研ぎ始める。

「それにも兄貴。こんなカツコイイナイフ、どこで購入してきたんですか？」

「ネットでな。オレはあまり信じてないが、17年前に異世界で？ チンピラ狩り？ を殺したナイフだそうだ」

『！？ 何だと……！？

「へえ、？ チンピラ狩り？ を殺したナイフつか？」

「面白そうだつたから購入してみたんだ」

「……それは本当か？」

私は思わず声を出してしまつ。

「起きてたのか。いつからだ？」

「最初からだ。私の質問に答える」

「やだね」

……このナルシスト、本氣で殺つてやるうか。

「兄貴。どうします？　おいらは研ぎ終わつたつよ？」

「じゃああの刹那を弱らせておけ」

「了解つす」

坊主が右手にナイフを持つて私に向かつてきた。

「……甘すぎるな」

私は坊主の右手首を掴んだ。

「ナイフの扱い方が下手糞すぎる」

「んなつ！？」

そして、投げ飛ばした。

「何で茶髪はこんなにナイフの扱いが下手なんだ。……その程度の実力で私を殺ろうとは、いい度胸だな」

私は勉強道具を入れていた鞄から短剣が入つたケースを腰に取り付ける。こんなこともあろうかとケースを改造してた甲斐があつた。短剣が入つたケースと一緒に愛用のバンダナを取り出した。

「それは！？」

「お前たちが知る必要はない。……？チンピラ狩り？の異名は伊達じゃないことを教えてやる」

髪を結びながら私は言つ。男になつてからも髪が長いから邪魔だ。切ればいい話だがすぐ伸びて面倒すぎる。結び終わつたあとはその上からバンダナを付けた。

「さあ、宴の始まりだ」

「舐めるなこの細腕！」

坊主がもう一度右手にナイフを持つて私に向かつてくる。

「無駄だ」

力キンッ！

私は一瞬で短剣を取り出し、それでナイフを受け止めた。

「<sup>オマエ</sup>刹那もナイフ所持かつ！？」

「ナイフではない。短剣だ」

誰が何と言おうとナイフではない。短剣だ。

私は坊主を弾き飛ばす。

「つ……強……」

ショートヘアが唖然としている。

……やつちまつたな、私。短剣だけはなるべく使わないように気を付けていたのに。

「兄貴い！ <sup>アイツ</sup>刹那かなり闘い慣れてるっす！！」

「み……みたいだな……」

流石のナルシストもたじろいていた。

「だが！ オレたちは刹那なんかよりずっと強い！ オレが相手をする！」

『よつ、兄貴！』

はあ……ナルシストがきた……。

「おい刹那。お前、？ チンピラ狩り？ を知っているようだな

ナルシストが戦場に出てから的第一声がそれだつた。

「嗚呼。よく知っている」

何せ本人だからな。知らない方がおかしい。

「どんなやつなんだ？ 知つてゐなら解るだろ？」

ナルシストはゆっくり私に近づいてきた。

「柔道・剣道・弓道・少林寺を完璧に身に付けていた女子高生だ」

自分のことをこんな風に言うときが来るとは思わなかつた。とり

あえず威圧感だけは伝えておくとしよう。

「女……だとつ……！？」

ナルシストは驚いている。

「嘘をつくな……」

「俺は基本嘘なんぞつかん」

ついてはいけない嘘は、な。つかなければならぬだつたら当ついた気がする。

「……？ チンピラ狩り？ の…… その女の本名と… 殺された時刻は？」

「名前は美川 香<sup>フルネーム</sup>。20XX年6月29日15時37分、阿呆なチ  
ンピラに後ろから心臓付近にナイフを突き刺されて殺された」

「お前…… 隨分と詳しいんだな。何故だ？」

あー、もういいや。隠すの面倒くさいし言つちやえ。

「当たり前だ。本人だからな」

三人は目を見開いた。フ、驚いたかこの阿呆どもめが。

「さつき？ チンピラ狩り？ は女だと言つたばかりだろ！？」

と坊主。驚くのはそこなのか。死んだのにどうして今ここにいるのかとか、そういうのじゃないんだな。

「お前たちバカにでも解るよう説明するとなると難しい。が、私は？ チンピラ狩り？ の生まれ変わり…… とでも言つておこづか」とりあえずこう言つておくことにする。

「あと、このバンダナと短剣は当時のものだ」

「そんな… にどが… ありえるのか… ー？」

ナルシストはペタンと両膝と両手をついた。

「残念ながらありえるんだ。…… わて」

私は体制を低くした。

「選択させてやろうか。四分の三死ぬか？ 五分の四死ぬか？」

『で、できれば百分の一でお願いしますつ！』

阿呆三人組は脅えていた。

まあ確かにあの選択でどちらかを選ぶバカはいないよな。流石に。

「……仕方がない」

とりあえずナルシストには右頬に、ショートヘアには右腕に、坊主には左足に軽い切り傷をつけ、短剣を閉まつた。そしてバンダナを取り、結んでいた髪もほどく。

「次はないとと思え」

鋭く睨み付け、私はその場を去った。

すまん神様。私、阿呆なチンピラどもに正体言つちまつたわ。

そんで次の日の休み。

「刹那君」

図書館に行こうとしたたら、担任に呼び止められた。

「…何ですか？」

「今すぐ職員室に来てください。お伝えしたいことがあります」

教室はざわつき始めた。

いつもとは違う、かなり深刻な顔をしている。だからわざとふざけたくなるんだよな。

「そういうえば、何かがあれば必ず職員室に呼び出されますよね。何ですか？」

担任はため息をついた。

「流石にクラスメートには聞かれたくないでしょう。自分が停学処分になつたことなんて」

と呆れているよう私に言つた。

「……先生、今、私が、停学、処分、と、言いま、したか？」

「はい。原因は昨日喜村君キムラと起こしたトラブルです。まさか私も刹那君が短剣を所持しているとは思いませんでしたよ

「えつ？」

「馬路かよ」

「そんなん」

「本当だつたらあちしふァンクラブ抜けるつー」

ざわめきが大きくなる。最後おかしな発言があつたのは空耳だと思つておひや。

「……何の話でしょ、うか」

「とりあえずしらばつくれておくことにした。話すの面倒くさいし。

「昨日、隣のクラスの喜村君が？刹那に殺されると思つた？と言つて騒いでいたんですよ」

「何かの間違いですよきつと。

大体、喜村に殺されかけたのは俺の方でしたから。あいつらナイフ隠し持つてたし。自分等のナイフで切つたかどうかのガラスで切つたんじゃないですか？」

半分事実、半分嘘。生き残るには嘘も大事だと、転生前叔父に教えられた……記憶がある。

「……まったく、刹那君はいつも真顔なので何が嘘で何が本当か解りませんね」

私は本日一度目となる担任のため息を叩きしてしまった。

「とにかくこれは決定事項です。刹那君、明日から一週間の停学処分を言い渡します」

あ～あ。人生初の停学処分か。前世では相当のチンピラを警察送りにしていたのに、一度も停学処分を受けたことがなかつた。そのほうが不思議だけど。

まあ、しゃーない。あと六日間、勉強に励むか。そのあとは海の家の手伝いをしよう。私も暇だし叔母たちも忙しそうだし。

停学処分のことを叔母に話すと、いつになく悲しそうな顔をした。叔母が無理矢理笑顔を作り、「部屋に戻つて勉強に集中しなさい」と言われたときは、私も胸が痛かつた。

部屋に戻つてから、私は後悔していた。何であんなことをしてしまつたんだと。身の危険に晒されているのならば逃げればよかつた筈だ。そうすれば停学処分にもならなかつたし、叔父や叔母をあんに悲しませることはなかつた。

私があんな行動をとってしまったのは、多分私の中のプライドと  
自分の人道が騒いだから。余計なプライドによつて私はあんなこと  
をしてしまつた。余計な人道によつて私はあんなことをしてしまつ  
た。

……今更後悔しても遅いな。勉強に集中するしかない。集中しよ  
う。

私は、学校で使用しているルーズリーフを乱暴に取り出した。

## I | 難題（論議文）

短いです

停学処分を言い渡された日から六日が経つた。この六日間、勉強と海の家の手伝いしかしていない気がするといつか絶対にそれしかない。……まあ飯食つたりとかの日常茶飯事はしたが。

「ふう……」

そして19：27分現在、私は部屋で珈琲コーヒーを飲みながら窓いでいる。この間に珈琲を飲めば寝れなくなってしまうが、時間は無駄にしない。振り分け試験前の下調べに使う。

「完璧だ」

自分にしか聞こえないくらいの声で私は呟いた。私が熱さえ出さなければ、狂いのない完璧な計画。

珈琲を飲み終わり、コップを机の上に置き、机の椅子に座り直し、お気に入りのシャーペンを手に取る。そして大学ノートを開き、そのページの一番上にこう書いた。

〔文月学園振り分け試験 最終調整ページ〕

次の日の朝。目が覚めた私は、急いで白黒（3：2）の長Tと紺色のジーパンに着替え、靴下を履いて一階に降りた。

「叔母さんおはようござります」

「おはよう翠。早く飯食べな。今日は絶対に遅刻できないんだろう?」

私は黙つて頷き、食卓につく。田の前には、

「……何でオムライスなんですか?」

何故か真つ直ぐなケチャップで綺麗に飾られた夕食向きなオムラ

イスが置かれていた。

「本当は卵焼きを作りたかったけどね、フライパンの形を間違えちまつたんだよ」

その言葉で私は納得する。確かに叔母ならなくもなぞうな間違いだ。でも形を間違えたくらいでオムライスに変えようと思える叔母がすごいと思つ。

「いただきます」

数分後。私は珈琲を飲みながら数学の教科書を読んでいた。夜中に最終調整をしようとは思ったのだが結局途中で寝てしまったんだ（…「…」）……仕方ないだろう、私は夜が苦手なんだから。珈琲を飲んでも徹夜まではできん。

「翠、時間大丈夫かい？」

叔母にそう言われて時計を見る。06：13だ。

「あー……はい。もうそろそろ出ます」

私は英語の教科書を閉じ、テーブルの上に置く。表紙の落書きがよく目立つ。あのナルシストがやつたのだろう。幼稚な嫌がらせだ。気にしてないが。

こんな時間にでるなんて早すぎる、と言いたいやつがいるだらうから説明してやろう。

クラス振り分け試験が始まるのは08：00。ここから文月学園に行くには一時間半かかる。バス停まで五分、バスで三十分、そこから電車の駅まで五分、電車で三十分、そして駅から文月学園までが二十分。……勿論徒歩だ。徒步以外に何があると言つ。

私はジャケットをはおり、靴を履いた。

「いってきます」

そして、鞄を左手に家を出た。

07：25。バスや電車での長い旅の末、ようやく文月学園がある都市に到着した。バスは酔うかと思った。死にそつなくらい気持ちが悪かった。

そして現在の時刻は07：35。四つ角を左に曲がる。

「よーし明久あきひさ、テスト前の小手調べだ！」

と、前の方に一人の男子高校生を発見した。文月学園の生徒だろうか。

「？三権分立？は？司法？と？立法？ともう一つは何で成り立つか？」

身長が高く髪型が赤いたてがみのような奴が明久と言われる茶髪のチビに問題を出題した。……なんて簡単な問題なのだろうか。答えは？行政？だな。

「ふ……あまり僕を見くびらないでくれよ雄おう一……。……一つまでなら絞れる」

明久という茶髪が訳のわからないことを言つた。「一つ……？」

「ほう」「？」

「？憲法？か？漢方？のどつちがだつたはず……」

「ここにも茶髪の阿呆あわいがいたようだ。

「……？行政？だ」

「雄一」と呼ばれるたてがみ野郎は呆れたような声で正解を告げる。呆れるのも無理はないと思つ。

「あ、それじゃウチからも～！」

元気のよさそうな女子高生が横を通り過ぎて行つた。そして一人の後ろで止まり、

「では基礎問題！？CH<sub>3</sub>COOHとは何でしょ～？」

と科学の問題を出題する。一人は後ろを向いた。……基礎がわからんとは最悪だな私。家に帰つたら復習するか。

「…………」

茶髪は黙り込む。と思いきやクルツと進行方向を振り向き、

「吉井？」

「………… 英語は苦手なんだ」

「え……？ これ英語じゃなくて科学」

「じゃあ僕につちだから！」

と言つて走り去つていった。科学を英語と間違えるとは相当の馬鹿だな。

「ちょ、ちょっと吉井！ アンタ相当ヤバインじゃー…？」

女子高生はその後を追う。

赤髪や女子高生はともかく、あの茶髪はFクラス逝き確定だらう。十問に一門は解けるとか言つてやうだ。

「おいお前」

む？

「私のことか？」

「お前以外に誰がいるんだ」

言われてみればそうだった。おわりには誰もいない。

「あいつ、どこに入ると思つ？」

きつとあいつといつのはあの茶髪の「」と、さういふのはクラスのことだらう。赤髪の質問に私は、

「F」

と歩きながらも即答してやつた。

「お前もそういうと思うか。そうだよな。誰がどう見ようともうだよな。

……で、お前誰だ？ 見かけない顔だな」

今更かよ。このたてがみ野郎も相当の馬鹿だ。FはなかつたとしてもEか？

「私は刹那翠だ。春から文理学園に転入することになった。一応振り分け試験も受けさせてもう一つになつていい」

「そうか。俺は坂本<sup>さかもと</sup>雄二だ。よろしくな刹那」

たてがみ野郎は坂本と言つひしご。

「嗚呼。よろしく」

「いや、言つことしかできなかつた。」

「とにかく剣那」

「翠でいい」

「なら翠、何で文月学園に転入しなうと思つたんだ？」

坂本は突然こんなことを質問してきた。

「……試召戦争」

「ふーん」

おい坂本。質問しどこにそれかこの野郎。

「あ、やべ。ゆうくじしてる暇ねえんだつた。じゃあな翠！ 試験頑張れよ……」

そう言い残し、坂本は走つていった。

なんだいつ。自分から話し掛けたくせに自分から会話を終わらせやがつた。おかげで私が自由に使える時間が減つてしまつたではないか。

……私も急ぐとするか。

五時間後。まさかこんなに時間が掛かるとは思わなかつた。せいぜい四時間程度だらうと思つていていた私が甘かつたようだ。

「はあ……」

誰かとともにため息をつく。坂本ではなさそうだ。

「お主も疲れたのか？」

爺言葉で話しかけてくる誰か。ここは男子生徒だらう。

「そりや五時間ぶつ続けでテストは疲れるだろ。何で休憩させてくれないんだ」

不満しかない。

「仕方がないであらう。それがここなんぢや。ビリウドの主誰ぢや？」

見かけぬ顔じやのう

誰かこの学園の奴等に自己紹介を教えてやつてくれないだらうか。

「刹那翠だ。翠でいい」  
「そうか。ワシは木下秀吉きのしたひでよし。秀吉と呼んでくれ。ようじく頼むぞい」

そう言って私に微笑みかける秀吉。

「嗚呼。春からよろしくな秀吉」

この時私は、生まれて初めて男子の同級生を下の名前で呼んだ（勿論前世含む）。

帰宅後、私はソファーに頭から飛び込んだ。眠くて仕方がない。……が、ここで寝てしまつてはいけないことくらい分かっている。ちゃんと部屋の鍵を閉めてベッドで寝なれば。

「翠、アンタに電話だよ」

叔母が私に電話を差し出す。誰だ？ 家の電話番号は学校しか知らなかつた筈だが。

「……代わりました、翠です」

『今海の家の前に』ブツツ

一刻も早く部屋に戻つた方がよさそうだ。

あれから数週間が経ち、転生してから5回目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。私は花を愛でるほど雅な人間ではないのだが、その眺めには一瞬目を奪われる。

しかし、それも一瞬のことには過ぎない。私は今、茶髪の馬鹿を右手で掴んで、初日から遅刻と言つ最悪なシナリオを走り抜けようとしていた。

ことの始まりは数分前に遡る。

「ねつ、寝坊したあつ！」

私は時計を見てベッドから飛び降りた。ここから文月学園までは走つても五分かかる。しかし起きたのは丁度ホーミルム六分前。マトモに飯を食う時間もない。

制服に着替え寝癖で跳ねた髪を整えたあと、炊飯器を開けて手に塩をつけてからご飯を握る。これで塩握りの完成。握り飯は一個数秒でできるから急いでいるときに便利だ。出来上がった握り飯を口に頬張る。

そのまま鞄を取り、家を出た。

右に曲がって走り出そうとすると、

「うわあつー？」

「痛つー！」

誰かとぶつかつた。

「いつたたた……ちょっと！ ちゃんと前見て歩いてよー。」

キレられた。当たり前だが。

「悪い、遅刻しそうで急いでたんだ」

立ち上がり制服についた砂をはたき落とす。相手は文月学園の

生徒らしい。制服が同じだ。

「えつ、君も遅刻なの？」

「……お前も遅刻か。なら急げ！」

私は相手の手首を掴み、走り出した。

そのまま私は今も走り続けているというわけだ。

「吉井、刹那、遅刻だぞ」

玄関を走り抜けようとしていた私は、玄関の前でドスのきいた声に呼び止められ足を止める。声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。吉井？ 吉井ってどこかで聞いたような……。

「あ、鉄じ　じゃなくて、西村先生。おはよつじさいいます」

茶髪の馬鹿（もう吉井でいいや）が軽く頭を下げて生活指導の西村教諭に挨拶をする。試験のときは色々とお世話になつた。

「今、鉄人つて言わなかつたか？」

「ははつ。気のせいですよ」

「ん、そうか？」

「気のせいじゃないですよ西村先生。遅刻してすみません」

それについても、鉄人とはなんのことだらう。西村先生の渾名か？

「刹那は吉井に比べてまともだな。『おはよつじさい』があれば完璧だが」

吉井と比べられたくはなかつた。

「あ、すみません。えーっと　今日も肌が黒いですね」

「……お前には遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか？」

「そつちでしたか。すみません」

「まったくお前というヤツは……いくら罰を与えても全然懲りないな」

溜め息混じりに先生がつぶやく。吉井は遅刻の常習犯「先生。僕、遅刻はあまりしてないですよ?」

ではないようだ。

「遅刻は、な。ほら、二人とも受け取れ」

先生が箱から封筒を取り出し、それぞれ私たちに差し出してくる。宛名の欄には『吉井明久』<sup>よしこ あきひさ</sup>『刹那翠』と大きく名前が書いてあった。嗚呼、吉井は? 行政? もわからなかつたあの馬鹿だつたな。吉井を馬鹿というと吉井家に失礼だから明久でいいか。

「あ、どーもです」

「ありがとうございます」

頭を下げながら受け取る。

「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してんですか? 掲示板とかで大きく張り出しちゃえればいいのに」確かにそうだ。こうやっていちいち全員に所属クラスを書いた紙を渡すなんて、面倒なだけだろう。丁寧に一枚一枚封筒に入れてあるし。

「普段はそうするんだけどな。まあ、ウチは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一貫つてワケだ」

「そういうもんすか」

適当な相槌を打ちながら封に手をかける。さてと。私はどこのクラスになつたのだろうか。少し緊張するな。

そう言えば私は、ずっとFクラスは絶対に嫌だといつておきながら一度も説明をしたことがなかつたな。一応説明しよう。

私がこれから通うことになる文月学園はクラスがAからFまであり、二年生以上はAから順に振り分け試験の成績順でクラスが決まつていく。頭のいいヤツはAクラス、悪いヤツはFクラス、といっ

た具合だ。つまり所属しているクラスだけで頭の良し悪しがわかつてしまふ。個人的に馬鹿しかいないFクラスだけは避けたい。それ以外だつたらどこでもいい。

「刹那。お前は本当に勿体無いミスをしたな。そのミスさえなれば良くてAクラス上位、悪くても下位になれた筈だったんだが」

思つたより頑固に糊付けされていて、封筒がうまく開かない。仕

方ない、上を少し破くか。

ピッと軽い音を立てて封を切る。中を除くと、そこには一枚の紙が入つていた。

とてつもなく嫌な予感がする。

「まさかお前が」

折り畳まれた紙を開き、書かれているクラスを確認する。

『刹那翠……Fクラス』

「名前記入欄に一問目の答えを書くとは思つてもいなかつたぞ」

いづして私の最低クラス生活が幕を開けた。

明久がどこのクラスかは　　聞かなくてもわかることだ。

## 四題目（前書き）

### 【第一問】

問 以下の問いに答えなさい

『調理のために火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めるとき問題が発生した。このときの問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。』

姫路瑞希の答え

『問題点…マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例…ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目と言つ引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太・剣那翠の答え

『問題点…ガス代を払つていなかつたこと』

教師のコメント

そこには問題じやありません。

吉井明久の答え

『合金の例：未来合金（すいごん）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

「はあ……」

気持ちが落ち込んだまま一段一段階段を上がっていく。

「溜め息つきすぎだよ。えーっと……」

「刹那翠だ。翠でいい」

何故覚えてないんだこいつは。まあ名乗つてないのは私なのだが。

「そうそう、翠だったよね。あ、僕は吉井」

「明久だろ」

「やめて！」明久と書いてバカと読むのはやめて！――

「じゃあ吉井明久」

「明らかにそっちの方が酷いよね！？」

「仕方ない。ちゃんと呼んでやるか。」

「安心しろ明久。半分は『冗談だ』

「残りの半分は！？」

そんな会話をしているうちに二階へと足を踏み入れた。まず目の前に現れたのは通常の五・六倍はあるつかと言ひ広さを持つ教室だった。

「……なんだろう、このばかデカい教室は」

明久も驚いているようだ。

「ここがAクラスだろうか。」

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの一年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願ひします」

足を止めて大きめの窓から中を覗いてみると、髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきつちり着こなした知的女性の代表のような教師がいた。

彼女が告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大ささのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示された。

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人用エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいますか？」

教室は五十人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があった。

冷蔵庫には当然のように各種飲料やお菓子を含めた様々な食料が、エアコンは教室どころか各人に一台。それぞれが好みの温度に調整できるようになっている。

更に見渡してみると天井は総ガラス製でりながらスイッチ一つで開閉可能となっており、壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれていた。まるでホテルのロビーだ。

参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給致します。他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなく何でも申し出てください」

おい、冷蔵庫の中身まで支給するのは少しおかしいだろ学園側。「では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」「…………はい」「…………はい」

名前を呼ばれて席を立つたのは、黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような少女。

物静かな雰囲気を持つ彼女はその整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放っていた。

クラス全員の視線が集まる。

クラス代表　つまり一年生のクラスを編成する振り分け試験において、この教室内で誰よりも優秀な成績を納めた生徒。

更に言つなれば、学年で最高成績を誇るAクラスでのトップはそのまま一年生のトップということになる。注目を浴びるのは当然のことだろう。

「……霧島翔子です。よろしくお願ひします」

そんな視線の中心にありながら顔色一つ変えずに淡々と名前を告

げる学年代表、霧島。

その目はクラスメイト全員にむけられているようでありながら、よく見ると同性の級友たちにのみ向けられていた。ヤツも同性愛者なのだろうか？

「Aクラスの皆さん。これから一年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように」

担任教師の結びの言葉が告げられ、霧島が会釈をして席に戻る。と、こうしてはいられない。逝きたくはないが、私も自分のクラスへ向かわなければ。

私は走り出さない程度に廊下を急いで進んでいった。

二年F組と書かれたプレートのある教室の前にきた。早く入って遅刻を謝りたいところなんだが明久が邪魔で入れない。

「なんて、考えすぎかな」

明久が意味のわからない独り言を漏らす。そして勢いよくドアを開け、

「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ 」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

愛嬌たっぷりにいい放つがその言葉は教壇に立っている男の一言によつて台無しとなつた。教師じゃないことは明らかだ。

「聞こえないのか？ ああ？」

明久は睨み付けるように教壇に立つている男を見た。私も一方右にずれてその顔を確認する（残念ながら私は明久よりも身長が低い）。

○  
その背は以外と高く、だいたい180cm強。やや細身ではあるが華奢なわけではない。むしろボクサーのような機能美を備えた細さを感じる。視線を上にずらすと、現れたのは意思の強そうな目を

した野性味たっぷりの顔。短い髪の毛がシンシンと立つていてまるでたてがみのように見える。坂本だったのか。

「……雄二、何やってんの？」

「坂本、何で教壇に立ってるんだ？」

明久と同じタイミングで質問してしまつ。ちゃんと聞き取れたらうか。

「お、翠もいたのか。安心しろ翠、ウジ虫野郎は明久だからな」「大丈夫だ。私だったとしても特に気にする気はない。で、一度目だが何で教壇に立ってるんだ？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がつてみたんだ」

「先生の代わりって、雄二が？ 何で？」

明久が口を挟む。

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？ それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

ニヤリと口の端を吊り上げる坂本。明久の顔も綻んでいる。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

ふんぞり返つて床に座っているクラスメイトたちを見下ろしている坂本。

そう、クラスメイトは皆床に座っている。理由は簡単、椅子がないからだ。

「そう言えば、雄二と翠って知り合いなんだね？」

「まあな。振り分け試験当日の朝に少し話した。正直あの時は翠のこと

馬鹿かと思っていたとかだったら一発殴る。

「女かと思つていた」

「……どうやら殺されたいようだな」

私は指をポキポキ鳴らす。まあ確かに私は前世は女だったし見た

田もほとんど前世と変わつてないが。

「わ、悪かつた！俺が悪かつたから落ち着け翠！？」

「……次そんな発言をしたら逝くと思え」

ちつ、いいストレス発散になると戻つたのに。

「それにしても……流石はFクラスだね」

明久が話題を変えようとしているのか突然こんな話を切り出す。とりあえず座れそうなスペースでも探すか。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に背後から霸氣のない声が聞こえてきた。

そこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貰相な体に着た、いかにも冴えない風体のオッサンがいた。どう見たつて十代には見えないしこのオッサンが担任だろう。

「それと席についてもらえますか？ ホールーム HRを始めますので

「はい、わかりました」

「ういーす」

「へーい」

私たちはそれぞれ返事をして（上から順に明久、雄一、私だ）そちらの席（？）に着く。

先生は私たちを待つてから壇上でゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。一年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしくお願いします」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとしたが、やめた。チヨークすらろくに用意されていないようだ。仕方ない、黒板消しと一緒に明日持つてくるか。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されますか？ 不備があれば申し出してください」

五十人程度の生徒が所狭しと座つている教室には机がない。あるのは畳と卓袱台と座布団。何とも斬新すぎる設備だ。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」と、クラスメイトの誰かが先生に設備の不備を申し出る。

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

教室の隅には蜘蛛の巣が我が物顔で形成されており、壁はひび割れや落書きのない箇所を探す方が困難といった状態だった。まるで廃屋のようだ。想像以上に酷い。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」「どこからというわけでもなく、教室全体からかび臭い独特の空気が漂う。きっと床に敷き詰められている古い畳のせいだろう。明日の朝は玄関の前に家の車がとまることになりそうだな。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生の指名を受け、車座を組んでいた廊下側の生徒の一人が立ち上がり、名前を告げる。

「木下秀吉じや。演劇部に所属してある」

「誰かと思えば秀吉じゃないか。

独特の言葉遣いと小柄な体。肩にかかる程度の長さの髪をゆつたりと縛つたいでたち。そしてもう一つ付け加えるならば『美少年』という言葉が等しいアイツは木下秀吉。男子同級生を下の名前で呼んだのはアイツが初めてだった。

「というわけじや。今年一年よろしく頼むぞい」

軽やかに微笑みを作り秀吉は自己紹介を終えた。

「…………土屋康太」

秀吉が座ったと同時に次のヤツが立ち上がり名前を告げた。

口数が少ないヤツのようだ。小柄だが引き締まつた身体で運動神経も良さそながな。どうしておとなしくしているのだろうか。にしても、見渡す限り男だな。学力最低クラスともなれば、女子

もほとんどいないのだろう。

「…………です。海外育ちで、会話はできるけど読み書きが苦手です」少し考え方をしているつむじこまた次のヤツだ。……この声はどうかで聞いたような気がする。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったのです。趣味はこの声でドイツ育ちとなると、私の中で該当するのはただ一人。名前は確か、

「趣味は吉井明久を殴ることです」

Minami Simada、島田美波しまだみなみだった（下の名前で呼んだのは前世含み美波が初めてだった）。日本に来て恐ろしくピントポイントかつ危険な趣味を持ったようだ。いつ日本に来たんだろうか。

「はりはるー」

美波は笑顔で前の席の明久に手を振る。

「…………あう。島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

美波の自己紹介が終わり、その後は淡々と自分の名を告げるのみの作業が進む。

突然明久が軽く息を吸い、立ち上がった。明久の番が来たんだろう。

う。

この馬鹿のことだ、きつとろくなことを言わないに決まってる。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

糞馬鹿。

『ダアアーリイイーン――』

野太い声の大合唱。急に吐き気がしてきた。畜生、吐いたら全部お前の責任だからな糞馬鹿野郎。

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願ひします」作り笑いでごまかし、青い顔の明久は席に着く。吐き気が止まらない。Fクラスはいろいろとおかしい気がする。

……次は私の番か。適当に済ませておこう。

私はスッと立ち上がった。

「刹那翠だ。得意科目は日本史と保健体育、苦手科目は科学や数学などの理系。今日から文丘学園に通うこととなつた。一年間よろしく頼む」

そして一分もかけずに自己紹介を終わらせ、席に着く。

その後もしばらく名前を告げるだけの単調な作業が続き、いい加減に眠くなってきた頃に不意にガラリと教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えつ？』

誰からというわけでもなく、教室全体から驚いたような声が上がる。

クラスがにわかに騒がしくなる中、数少ない平然としている人物の一人、福原先生がその姿を認めて話しかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします

……

小柄な身体をさらに縮こめるようにして声を上げる姫路。

肌は新雪のように白く、背中まで届く柔らかそうな髪は、優しげな彼女の性格を表しているようだ。その可憐な容姿は、男だらけのFクラスで異彩を放っている。

「はいっ！ 質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と右手を挙げる。

「あ、は、はいっ。なんですか？」

登校するなり、質問がいきなり自分に向けられ驚く姫路。

「なんでここにいるんですか？」

凄く失礼な質問が浴びせられる。

私は明久の背を軽くつついた。

（どうしたの？）

（今質問したヤツ失礼すぎないか？ というわけでぶつ殺していいか？）

（殺しちゃダメだよ翠！ それにこれはクラス全員の疑問なんだよ）

（どういうことだ？）

（姫路さんの可憐な容姿は人目を引くし、何よりその成績が凄いんだ。入学して最初のテストでは学年一位を記録して、その後も上位一桁に常に名前を残しているほどだつたんだよ）

なるほど。そんな姫路が最下層に位置するFクラスにいるわけがない。誰もが彼女はAクラスにいると思つていてるのだらう。

「そ、その……」

緊張した面持ちで身体を硬くしながら姫路が口を開く。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

その言葉を聴き、クラスの人々は『ああ、なるほど』とうなづいた。

試験途中での退席は0点扱いとなる。きっと姫路は昨年度に行われた振り分け試験を最後まで受けられず、結果としてFクラスに振り分けられてしまったというワケだらう。

そんな姫路の言い分を聞き、クラスの中でもちらほらと言い訳の声が上がる。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出てFクラスに』

『ああ。科学だろ？ アレは難しかつたな』

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝させてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

これは予想以上に馬鹿だらけだ。

「で、ではつ、一年間よろしくお願ひしますつ！

そんな中、逃げるように明久と坂本の隣の卓袱台に着こなつとする

姫路。

「き、緊張しましたあ～……」

席に着くや否や、姫路は安堵の息を付いて卓袱台に突つ伏す。

「あのさ、姫～」

「姫路」

明久の声にかぶせるように隣に座っている坂本が姫路に声をかける。

明久は相当残念そうな顔をしていた。

「は、はいっ。何ですか？ えーっと……」

慌てて坂本の方を向き、裾を正す姫路。いすではなく座布団に座つているため、襟が乱れやすいのだろう。

「坂本だ。坂本雄二」。よろしく頼む

「あ、姫路です。よろしくお願ひします」

姫路は深々と頭を下げる。育ちがよさそうな奴だ。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

思わずという風に口を挟む明久。

「よ、吉井君！？」

明久の顔を見て驚く姫路。まあ確かに明久はブサイクすぎて驚くな。

「姫路。明久がブサイクですまん」

私も思わず口を挟む。

「そ、そんな！ 目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃじゃないですよ！ その、むしろ…」

「…」  
顔を赤くして口ごもる姫路。姫路は明久に惚れているようだ。そんな姫路の前で明久を悪く言うのは流石に可哀想だろう。

「…まあ、そう言わると確かに見てくれば悪くない顔をしているかもしないな。あ、私は刹那翠だ。よろしくな姫路」「よ、よろしくお願ひします」

私のほうを向いて深々と頭を下げた。釣られて頭を下げてしまう。「あ、そういうえば俺の知人にも明久に興味を持つていてる奴がいた気がするな」

「という坂本の情報。明久は意外とモテるようだ。

「え？ それは誰？」

「そ、それって誰ですか！？」

明久のセリフが姫路に遮られる。ライバルは知つておいた方がいいという判断からだらうか。

「確か、久保」

久保なんて女子は聞いたことがない。久羽ならあるが。

「利光としみつだったかな」

久保利光 名前からして（性別／男）

この学園にも同性愛者がいたようだ。

「…」

「おい明久、声を殺してさめざめと泣くな」

知つたのが高校時代でよかつたな明久。私なんか小学の頃から同性愛者に付きまとわれているんだぞ。

「半分冗談だ。安心しろ」

「え？ 残りの半分は？」

「それより姫路、もう体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり平氣です」

「ねえ雄一！ 残りの半分は！？」

明久の声の空耳が聞こえる気がするが気にしない。

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

空耳じゃなかつたらしい。バンバン、と教卓を叩いて先生が警告を発してくる。

「あ、すみませ――」

バキイツ バラバラバラ……

突如、先生の前で教卓が「ヨミ肩」と化す。まさか軽く叩いただけで崩れ落ちるとは。どこまで最低な設備なのだろうか。

「え～……替えを用意してきます。少し待つていてください」

気まずそうに告げると、先生は足早に教室から出て行った。

改めてこの教室の酷さを思い知らされてしまった。

「あ、あはは……」

明久の隣で姫路が苦笑いをしていた。

そういうえばこの盗聴器、誰に付けようか。Fクラスで盗聴をして面白そうな奴はそんなにいないかもしねれない。馬鹿すぎで。右袖を見ながらふと思つ。

実は私は右袖に防水・GPS機能付きの盗聴器と小型イヤホンを隠し持つている。勿論イヤホンも防水機能付きだ（GPSは付いてない。だってイヤホンにGPSが付いていても不便なだけだろう？）。

袖をめぐる　が、盗聴器が見当たらない。あるのはイヤホンのみ。

……まさか、どこかで落としたか？　落としたなら音でわかるだろ？。

私は耳にイヤホンをつけ、スイッチを入れる。すると聞こえたのは、

「『……雄一、ちょっとといい？』」

あぐびをしているクラス代表に話しかけた明久の声。

「『ん？ なんだ？』『

「『『いこじやちょっと話してくから、廊下で』』『

「『別に構わんが』『

立ち上がって廊下に出る。

盗聴器は今明久のネクタイに付いているようだ。明久の声の方がよく聞こえた。

だ。

『んで、話つて？』

『この教室についてなんだけど……』

『Fクラスか。想像以上に酷いもんだな』

『雄一もそう思うよね？』

『勿論だ』

『Aクラスの設備は見た？』

『ああ。凄かつたな。あんな教室は他に見たことがない』

AクラスとFクラス、凄い差だ。一方はチヨークすらないひび割れた黒板で、もう一方はプラズマディスプレイ。これに不備のない人間はいないだろう。

『そこで僕からの提案。折角一年生になつたんだし、『しじょうせんそつ試合戦争』

をやつてみない？』

『戦争、だと？』

『うん。しかもAクラス相手に』

『……何が目的だ？』

警戒されているようだ。

『いや、だつてあまりにも酷い設備だから』

『嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろうが』

『そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校に来るわけが』

『お前がこの学校を選んだのは『試験校だから』その学費の安い』  
が理由だろ?』

つまり明久はそんなに金がないのか。きっと一人暮らしで仕送りをしてもらっているのにも関わらず他の趣味等に消しているのだろう。家族と暮らしているならそんな理由でこの学校に着たりなんかしないはずだ。

『あー、えーっと、それは、その……』

『……姫路の為、か?』

『ど、どうしてそれを!?』

『本当にお前は単純だな。カマをかけるとすぐ引っかかる』  
確かに坂本の言つとおり、単純だ。

『べ、別にそんな理由じゃ』

『何やつてるの翠? ぼーっと外見て』  
不意に右から美波に話しかけられる。

『い、いやなんでもない』

私はイヤホンのスイッチを切る。

『そう? なんでもないようには見えなかつたわよ。まあいいけど』  
ふう、よかつた。美波が盜聴器について興味を示さない奴でよかつたと思つ。いろいろと違う気がするが。

『それにしても、久しづりね翠。一・三年ぶりかしら』

『ああ、そうだな。会つたのが中一の夏だからそれくらいだらう』  
美波に会つたのは中学一年の夏休み、ドイツへ旅行に行つたときだつた。黄色いリボンとポニー テールと氣の強そうな目が特徴的だつたため、よく覚えている。

『葉月は元気にしてるか?』

ちなみに、美波には7つ年下の妹・葉月がいる。笑顔がほとんど絶えない奴だつた。

『ええ。とても元気よ。前と変わつてないわ。……あ、先生が戻つてきたみたい。じゃ、後でね』

美波が席に戻つていつた。その後、明久と坂本が席に戻つてきた。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願ひします」

壊れた教卓を変えて（それでもボロだが）、気を取り直してHRが再開される。

「えー、須川亮です。趣味は

「

特に何も起こらず、また淡々とした自己紹介の時間が流れる。

「坂本君、君が自己紹介の最後の一人ですよ

「了解」

先生に呼ばれて坂本が席を立つ。

ゆっくりと教壇に歩み寄るその姿はさつきまでのふざけた姿は見られず、クラスの代表として相応しい貫禄を身に纏っているようだ。ついでに思えた。

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

先生に問われ、鷹揚に頷く坂本。

別にクラス代表といつても、学年で最低の成績を収めた生徒たちが集まるFクラスの話。何の自慢にもならないどころか恥になりかねない。

それにも関わらず、坂本は自信に満ちた表情で教壇に上がり、私たちの方に向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

クラスメイトから大して注目されるわけでもない。Fクラスという馬鹿の集まりの中で比較的成績が良かつたというだけの生徒。他から見れば五十歩百歩といった存在。

「さて、皆さん一つ聞きたい」

そんな生徒が、ゆっくりと、全員の目を見るように告げる。間の取り方が上手いせいか、全員の視線はすぐに坂本に向けられるようになった。

皆の様子を確認した後、坂本の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて私たちも坂本の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが

「

一呼吸おいて、静かに告げる。

「不満はないか?」

『大ありじやあつー!』

二年F組生徒の魂の叫び。

「だらう? 僕だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそだ!』

『いくら学費が安いからと言つて、この設備はあんまりだ! 改善を要求する!』

『そもそもAクラスだつて同じ学費だろ? あまりに差が大きすぎ

る！』

堰<sup>せき</sup>を切つたかのように次々と上がる不満の声。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

級友たちの反応に満足したのか、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが

「

これから戦友となる仲間たちに野性味満点の八重歯<sup>やえば</sup>を見せ、

『FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ』

Fクラス代表、坂本雄一は戦争の引き金を引いた。

## 五問目（前書き）

### 【第一問】

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（1）得意なことでも失敗してしまつ』と
- 『（2）悪いことがあつた上にさらに悪いことがあせる餘地』

姫路瑞希の答え

- 『（1）弘法も筆の誤り』
- 『（2）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も樹から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴つたり』や『弱り田に祟り田』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

刹那翠の回答

- 『（1）猿の川流れ・河童も樹から落ちる』
- 『（2）泣きつ面踏んだり』

教師の回答

いろいろおかしいことござついてください。

吉井明久の答え

『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

## 五問目

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとつては現実味の乏しい提案にしか思えなかつた。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。

確かに誰が見ても、秀才が集まるAクラスとバカが集まるFクラスの戦力差は明らかだった。

文月学園に点数の上限がないテストが採用されてから四年が経過した。

このテストには一時間という制限時間と無制限の問題数が用意されている。その為、テストの点数は上限がなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができる。

また、科学とオカルトと偶然により完成された試験召喚システムというものがある。これはテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦うことのできるシステムで、教師の立ち会いの下で行使が可能となる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争 試召戦争と呼ばれる戦いだ。

その戦争で重要なのがテストの点数なのだが、AクラスとFクラスの点数は文字通り桁が違つ。正面からやりあつたとしたら、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうか。いや、学

年首席・次席ともなれば四・五人でも負けるだらう。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

そんな圧倒的な戦力を知りながらも、坂本はそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだらう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡る。

確かに誰がどう考へても勝てる勝負とは思えないだらう。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃つていてる」

こんな坂本の言葉を受けてクラスが更にざわめく。

根拠がある、だと？ まさか。姫路以外はほぼクズに等しい奴等が揃つていると言うのに。

「それを今から説明してやる」

不適な笑みを浮かべ、壇上からクラスメイトを見下ろす代表。

「おい、康太。畠に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「…………！（ブンブン）」

「は、はわつ」

必死になつて顔と手を左右に振り否定のポーズをとるのは土屋康太。

姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、ソイツは顔についた畠の跡を隠しながら壇上へと歩き出した。

「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性識者だ」

「…………！（ブンブン）」

ムツツリー  
寡黙なる性識者？

私は再び明久の背を軽くつつく。

（今度は何？）

（ひとつ聞きたい。ムツツリーーとはなんだ？）

（ただの『ムツツリスケベ』のことだよ）

なるほど。

『ムツツリーーだと……？』

『馬鹿な、ヤツがそうだといふのか……？』

『だが見ろ。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そつとしているぞ……』

『ああ。ムツツリーの名に恥じない姿だ……』

畳の跡を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誇つ。

「？？？」

姫路は頭に多数の疑問詞を浮かべているようだ。

まあ普通ならば秀才でもわからないだらう。『ムツツリーー』と

いうあだ名の由来なんて。

「姫路のことは説明する必要もないだらう。監だつてその力はよく知つてゐるはずだ」

「えっ？ わ、私ですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

もし試合戦争に至るとなれば、確かに彼女ほど頼りになる戦力はないだらう。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

誰だ、さつきから姫路に熱烈ラブコールを送る気持ち悪いヤツは。

「木下秀吉だつている」

秀吉？ 秀吉も成績がいいのか？

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

木下優子の、なんだらうか。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやつてくれそつな奴だ』

『坂本つて、小学校の頃は神童とか呼ばれていなかつたか？』

……まさかとは思つていたが、やつぱりそつだつたか。

坂本雄一。その名前は私も聞いたことがあった。成績の良さは上級生をも超え、小学校の頃は神童と呼ばれていたらしい。中学からは知らない。きっと中学で真面目に勉強していなくて成績が伸びなくなりその結果Fクラス送りになるほど成績が落ちたのだろう。

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

体調不良のわけがない。あの朝、坂本は普通に走っていた。

『実力はAクラスレベルが一人もいるってことだよな！』  
『いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気が教室中に満ちていた。  
気がつけば、クラスの士気は確実に上がっていた。』

「それに、吉井明久だっている」

……シン

そして一気に下がる。

なぜそこで明久の名前を上げる？ 明久はいてもいなくても同じ  
ような雑魚だと思うが。

「ちょっと雄一！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くそ

んな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！ 折角上がりかけていた士氣に翳りが見えてるし！ 僕は  
雄一たちとは違つて普通の人間なんだから、普通の扱いを つて、  
どうして僕を睨むの？ 士氣が下がつたのは僕のせいじゃないでし  
ょう！」

明久のせいだと思うのは私だけではないようだ。

名前が出て士氣が下がつた＝名前の人物のせいじゃないのか？

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察  
処分者』だ」

『観察処分者』？ なんだそれは。罰か？ ペナルティ

『……それって、バカの代名詞じゃなかつたっけ？』

クラスの誰かがそんな台詞を口にする。

「ち、違うよつ！ ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「否定するな、バカ雄二！」

「そうか。バカの代名詞なのか。明久にぴったりな愛称だな。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路が小首を傾げている。頂点に近い場所にいた彼女にバカの代名詞であるこの単語（？）は馴染みがないらしい。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういうた類いの雑用を、特例として物に触れるようになつた試験召喚獣でこなすといった具合だ」

本来、試験召喚獣は物に触ることができない。彼らが触れることができるのは他の召喚獣のみ。要するに幽霊のようなものだ。もつとも、校内の床には特殊な処理が施してあるらしいから、立つことくらいはできるようだが。

「そりなんですか？ それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違つて力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですね」

姫路の目がキラキラと輝いている。

「そんな大したものんじゃないと思つぞ」

私は思わず口をはさんだ。

「翠の言う通りだよ」

手を振つて否定のポーズをとる明久。

本当に大したものではない。自分の思うとおりに使役できるのなら凄く便利だ。なにせ、試験召喚獣の力はクズのよつな点数でもかなり強い。やううと思えば岩だつて碎けるだろう。

しかし、召喚獣は教師の監視下でなければ喚び出せない。つまり、便利に使いたくても使えないのだ。

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試験戦争で召喚獣がやら

れると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

本当に罰だつたようだ。しかし興味はある。あとで詳しく聞いてみるか。

「気にするな。どうせ、いてもいなくとも同じような雑魚だ」

「雄一、そこは僕をフォローする台詞を言つべきところだよね?」

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはロクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すつごい大胆に無視された!」

「黙れ明久。<sup>バカ</sup>でかい声で独り言を言うな」

「翠にはこれが独り言にしか見えないの!?」

明久と書いてバカと呼んだのにはつっこまないんだな。

「皆、この境遇は大いに不満だろ?」

『当然だ!!』

「ならば全員筆を執れ! 出陣の準備だ!』

『おおーーっ!!』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない! Aクラスのシステムデスクだ!』

『うおおーーっ!』

「お、おー……」

クラスの雰囲気に圧されたのか、姫路も小さく拳を作り掲げていた。

「明久にはロクラスへの宣戦布告の使者になつてもらひ。無事大役を果たせ!』

「……下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭うよね? 大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思つて行つてみろ』

『本当に?』

「もちろんだ。俺を誰だと思っている』

わざかな逡巡すらなく力強く断言する坂本の口からは、  
『嘘に決まつてんだろバーク』

と思つてゐるのが伝わつてくる。目を見て何を考えているか、それが当てるのは私の特技だ。

「大丈夫。俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」  
してゐるだろ。

「わかつたよ。使者は僕がやるよ」  
明久は見事に騙されたようだ。

「ああ。頼んだぞ」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、明久は毅然とした態度でDクラスに向かつて歩き始めた。

「坂本」

「なんだ翠」

「明久つて単純だな」

「ああ。それが明久だ」

「あとバカだな」

「そうだな」

「騙されたあつ！」

そう叫びながらFクラスに転がり込む明久。

息を切らせて床にへたりこむ明久に坂本が視線を落とし、

「やはりそうきたか

平然と言い放つた。

「やはりってなんだよ！ やっぱり使者への暴行は予想通りだつた  
んじやないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が勤まるか

「少しあはれどよ！」

普通は悪びれない。

「吉井君、大丈夫ですか？」

ところどころ制服まで破れている明久の有様を見て、姫路が明久に駆け寄る。

「あ、うん。大丈夫。ほんとかすり傷」

男として心配をかけまいとしているのだろう。

「吉井、本当に大丈夫？」

私には美波が心配しているようには見えなかつた。

「平氣だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かつた……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！ もうダメ！ 死にそう…」

慌てて腕を押されて転げまわる。そういうことだらうと思つた。  
「そんなことはどうでもいい。それより今からリーディングを行つぞ」

他の場所で話し合ひをするつもりのようで、坂本は扉を開けて外に出でいった。

「あの、痛かつたら言ってくださいね？」

そう告げ、姫路は小走りに坂本の後を追つた。

「大変じゃつたの」

秀吉が明久の方を叩いて廊下に走出る。

「…………（サスサス）」

自分の頬の辺りをさすりながら土屋が続く。

「ムツツリーー。覗いてたときの畳の跡ならもう消えてるよ？」

「…………！（ブンブン）」

「いや、今更否定されても、ムツツリーーがHなのは知つてゐから」

「…………！（ブンブン）」

「HJまでバレてゐるのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思

う」

「…………！（ブンブン）」

「何色だつた？」

「みずいろ」

即答がよおい。

「やつぱりムツツリーーは色々な意味で凄いよ」

「……………！」（ブンブン）」

明久たちがのんびり教室内で話をしていると、

「ほら吉井、翠。アンタたちも来るの」

ぐいっと美波に腕を引張られた。

明久は面倒くさそうな目をしていた。

「もちろん行くつもりだぞ」

「あー、はいはい」

「返事は一回ー」

「へーい」

「…………一度、Das Brechen ええと、日本語だと……」

美波が言いよどむ。

Das Brechen 確か調教だつたような。

「…………調教」

近くから土屋の声。

「そう。調教の必要がありそうね」

「調教つて。せめて教育とか指導つて言つてくれない？」

「じゃ、中間とつてZuchtiung」

「…………それはわからない」

「確かに、日本語だと折檻だつたかな？」

「折檻であつてるわ」

「それ悪化してるとね」

「そうか？」

「そう？」

明久には折檻くらいがちょうどいいだらう。

「というかムツツリーー。どうして『調教』なんてドイツ語を知つてるの？ 翠も『折檻』なんてドイツ語じこ覚えたの？」

「…………一般教育」

「土屋と同じだ明久」

バカ

まあ、ドイツに行くならドイツ語くらい知つておかなければな。

「……まあ、翠はよくわかんないけど相変わらずムツツリー一は性に関する知識だけズバ抜けてるね」

「…………！」（ブンブン）

そんな会話をしながら校内を歩いていると、先頭の坂本が屋上に通じる扉を開けて太陽の下に出た。

雲一つない空から眩しい光が差し込む。

春風とともに訪れた陽光に、風ではためく姫路のスカートを注視している土屋を除き、私たちは全員目を細めた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

坂本がフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

「一応今日の午後に回線予定と告げて来たけど」

明久たちもそれにならって各自腰を下ろした。私はフェンスに寄り掛かっているが。

「それじゃ、先にお昼ご飯つてことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べろよ？」

「そう思うならパンでもおじつてくれる嬉しいんだけど」

「明久。お前は昼食わないのか？」

これは私でも驚いた。

「いや。一応食べるよ」

「……あれば食べていると言えるのか？」

坂本の横槍が入る。

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食つて 水と塩だらう？」

坂本の哀れむような声。

栄養足りてんのか……？

「きちんと砂糖だつて食べているぞ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じやうつな」

「苦労人だな明久……」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな  
し、仕送りが少ないんだよ！」

「……バカだ。究極のバカだ。少ないならその中でやりくりしろよ。

一瞬でも苦労人だと思つてしまつたのは恥じるべきことだろ？」

「……あの、良かつたら私がお弁当作つてきましょつか？」

「え？」

この言葉には私も一瞬目を疑つた。

「本当にいいの？ 僕、塩と砂糖以外の物を食べるなんて久しぶり  
だよ！」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かつたじやないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

素直に喜ぶ明久。それはいいとして、

「塩と砂糖は食べると言わんぞ明久」

食べると言う表現はおかしい。

「……ふーん。瑞希つて随分優しいんだね。吉井だけに作つてくる  
なんて」

面白くなさそうな刺のある美波の言葉。本心は、

『弁当で好感度をあげようだなんて、瑞希もやるじやないの……』

私はとても知つてはいけないことを知つてしまつた気がする。

「あ、いえ！ その、皆さんにも……」

「俺達にも？ いいのか？」

「はい。嫌じやなかつたら」

明久が少し残念そうなのは気にしない。

「それは楽しみじやのう」

「…………（「ク」「ク」）」

「味には五月蠅いぞ？」

「……お手並み拝見ね」

姫路本人を含めると七人。作るのが大変そうだな。

「わかりました。それじゃ、皆に作ってきますね」「それでも嫌そうな顔一つしない彼女。

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな……」

「今だから言つけど、僕、初めて会う前から君のこと好き」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「にしたいと思つてました」

「今ほど通報したいと思つたことはない」

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じやぞ」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

「だつて……お弁当が……」

バカだな。

「さて。話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろ」

「そういえばそうだつた」

「雄」。一つ気になつていたんじゃが、どうしてEクラスなんじゃ?  
段階を踏んでいくならEクラスじやうりじ、勝負に出るならA  
クラスじやうりう?」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

坂本が鷹揚<sup>おうよう</sup>にうなずく。

「どんな考えなんだ?」

「色々と理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え? でも、僕らよりはクラスが上だよ?」

成績でクラスを分けられているため、Eクラスは当然私達のいるFクラスより振り分け試験の点数は良い。

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かつたかも知れない。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

「えーっと……」

明久がその場にいるメンバーを見回す。

「美少女三人と馬鹿が二人とムツツリが一人いるね」  
お前を入れて私抜きだと馬鹿が三人で秀才が一人で帰国子女が一人でムツツリが一人だ。どうやつたら女子が三人になるんだ。  
「誰が美少女だと！？」

「ええっ！？ 雄二が美少女に反応するの！？」

「…………（ポツ）」

「ムツツリーまで！？ どうしよう、僕だけじゃツツリ切れない！」

「まあまあ。落ち着くのじや、代表にムツツリー！」

秀吉がその場を制する。

「そ、そうだな」

「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してもツツリミ入れたいんだけど」

「ま、要するにだ」

コホン、と咳払いをして坂本が説明を再開する。

「姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目的である以上はEクラスなんかと戦つても意味がないつてことだ」

「？ それならDクラスは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確實に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

明久の目的は姫路の為のAクラス設備であつて、Dクラスではない。

「初陣だからな。派手にやつて今後の景気付けにしたいだろ？ それに、さつき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「作戦なんてあるのか。

「あ、あの！」

と、姫路にしては珍しくでかい声。

「ん？ どうした姫路」

「えっと、その。さつき言いかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試合戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはつっこみ、姫路の為について明久に相談されて」

「それはそうと……」

明久は坂本の台詞を遮るように、わざとでかい声を出す。  
「さつきの話、Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ」「負けるわけないさ」

明久の心配を笑い飛ばす坂本。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

不思議な感覚だった。

根拠のない言葉なのに、なぜかその気になつてくる。

坂本の言葉にはそんな力があった。

「いいわね。面白そうじやない！」

「ま、やってみる価値はあるか」

「そうじやな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……（グッ）」

「が、頑張りますっ」

打倒Aクラス。

荒唐無稽な夢かもしれない。実現不可能な絵空事かもしれない。しかし、やってみないと何も始まらない。

私自身のミスとはいえ、折角こうして同じクラスになつたのだ。このバカ達とともに何かを成し遂げてみるのも悪くない。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう

涼しい風がそよぐ屋上で、私達は勝利の為の作戦とやらに耳を傾けた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8913v/>

---

バカとテストと転生者の物語。

2011年10月10日03時24分発行